

旧三瀨銀行の建築保存研究

その1. 設計者像をめぐって

Architectural Investigation for the Restorative Preservation of the Former Mizuma Bank Part 1. Imaging the Architect of the Building

工藤 卓¹⁾

Takashi KUDO

Abstract: To restore and preserve the former Mizuma Bank, its authenticity, such as its aesthetic value and historical value, is examined. The result shows that the bank, a two-storied brick Renaissance-style, Art nouveau and Secession style ornament mixed building completed in October, Meiji 42, was planned by the businesspersons, like Tsunaji Nakamura, together with the plan of the laying of a railway, in attempting to promote local industry. As for its interior, white spaces were built in Modern style. The former Mizuma Bank thus proves to be an architectural cultural heritage with its value for local industry, its vista, its brick building style, its history of 100 year times, and artistic effect. And as the designer of the building, no person can be found but Kichijiro Nishihara, an assistant engineer working for the public works bureau in the Fukuoka Office.

キーワード: 文化遺産、保存、オーセンティシティ、ルネサンス様式、アール・ヌーヴォー、セセッション式
Keywords : Cultural heritage, Preservation, Authenticity, Renaissance style, Art nouveau, Secession style

1. はじめに

文化財建造物を歴史的・文化的価値を損なわずに恒久的に守り続けて活用することは文化財保護の基本姿勢である。

文化財建造物の保存修復の理念として求められるのが「オーセンティシティ＝由緒正しさ」¹⁾である。即ち、本物の材料・技法・意匠の美的価値観や歴史的価値観に基づく建築の希少性、典型性、歴史性を正しく把握したうえでの保存修復でなければならない。

旧三瀨銀行は、明治42年(1909)10月に福岡県大川市(当時は町)に竣工した煉瓦造2階建洋館で、西洋の古典系ルネサンス様式を基調とした建築である(図1)。その様相は、筑後川河口に架かる重要文化財筑後川昇開橋と一体となって、地域の歴史的景観を形成している(図2)。平成3年(1991)9月には大川市指定文化財に指定され、現在は民間会社が所有して改装活用がなされている。

しかし竣工から100年を経た現在、構造物煉瓦や小屋組の補強による安全性の確保はもとより、文化財として保護措置を計る本格的な修復工事は未だ着手できていない。しかし、このような文化財工事は、所有者に強い制約と費用の負担を負わせることになるため、建築基準法などの法的な緩和措置を計る行政の支援と技術指導を仰がねばならない。

本論は、旧三瀨銀行建築を対象にして、その建築意匠的



図1: 旧三瀨銀行東南外観(平成8年撮影)

特性および室内意匠の特性を鮮明にして保存修復活用に資するとともに、これまで解明できていなかった設計者像を考察することを目的にしている。

したがって、論文「その1」では、現存する旧三瀨銀行を特徴づける建築意匠に着目して、主に同時期に建った煉瓦造洋館建築を参考に、旧三瀨銀行の建築的特性とその設計者像を探る。また、論文「その2」では、金属製打出天井板に焦点をあて、その装飾美術的な工業製品を用いた室内意匠の特性とその設計者像を探る。

1) 近畿大学産業理工学部建築・デザイン学科 教授 kudotaku@fuk.kindai.ac.jp



図2：筑後川河口の歴史的景観（平成8年撮影）

2. 旧三瀨銀行建築

2-1. 本社社屋建設の背景

株式会社三瀨銀行設立の背景は、「大川市誌」²⁾および「大川市指定文化財調査報告書 旧株式会社三瀨銀行」³⁾に詳述されている。それを参考にすると、三瀨銀行は、明治27年(1894)に中村多平ら筑後川沿いの地元酒造業関係者5名の発起人によって、酒造会社「清力」の事務所脇に開設された「株式会社鐘ヶ江銀行」を前身としている。明治29年(1896)7月には「株式会社三瀨銀行」と改称し、明治42年10月に、建坪54坪の煉瓦造2階建本社社屋および煉瓦造塀付き倉庫、木造平屋2棟が、現在地（大字向島）に竣工している（図6）。取締役頭取は酒造会社「清力商店」の中村綱次であった。

中村綱次は、明治39年11月に自社の「営業所」を木造洋風建築に設計している（図3）。1階を事務所にあて、2階には接客用の大広間と喫煙室を設けて、中村家が収集した絵画を飾っていた⁴⁾。また明治40年には、地元経済人深川文十らと「三瀨馬車軌道株式会社」を創立、続く同41年には本務事業の発展に伴って「合名会社清力商店」を組織するとともに、「営業所」の正面前に路線を敷設する「大川馬車軌道株式会社」の取締役に就任している⁵⁾。

つまり中村綱次は、酒造業のみならず、銀行金融によって地場産業の振興発展を図るとともに、地域基盤を整備する鉄道交通機関の敷設に勢力を注ぎ込んだ実業家であった。

旧三瀨銀行は、これらの二つの鉄道の起点駅のほぼ中央部にあたる筑後川沿いに立地して、産業路が四方に伸びる要の位置に建設された。これら計画からは、地域産業基盤の近代化を進める都市環境整備の意図が伺える。

建築の規模は、間口6間、奥行き9間で、1階床面積54坪（178㎡）、2階床面積22坪（72.6㎡）、延べ床面積76坪（250.6㎡）である。「大川市誌」では、「筑後川河畔に辺を圧して立つ偉観は、当時大川ではもちろん、佐賀市にも比肩するものがなかったほど堂々たるもの」⁶⁾と評されている。ここで比較された佐賀市の銀行とは、明治39年に新築された木造2階建煉瓦タイル張りの佐賀銀行（大正2年に古賀銀行と

改称）を指している。それ以上に立派な旧三瀨銀行の雄姿が、当時の筑後川河畔景観のランドマークになって竣工したことが分かる。

2-2. 明治後期の福岡県の煉瓦造洋館建築

明治42年以前の福岡県の煉瓦造建築のほとんどは、近代産業の先駆的設備を有する、政府政策と直接に結びついた産業部門の大規模工場建築が主であった。そうした中で、当時唯一の洋館と呼ばれたのは、現存しないが明治20年に開かれた「第5回九州沖縄八県連合共進会の審査館」であった⁷⁾。その後に煉瓦造洋館建築が出現するのは、旧三瀨銀行の竣工と同じ明治42年に完成する辰野金吾・片岡安事務所設計、清水組施工の化粧積み煉瓦造2階建「旧日本生命九州支社」（福岡市・国指定重要文化財）（図4）である。清水組の田中実が設計した化粧タイル貼り煉瓦造2階建「旧大同生命福岡支社」（福岡市から八女市に移築）（図5）の竣工は明治45年であった。官庁工事では同45年竣工の咲寿栄

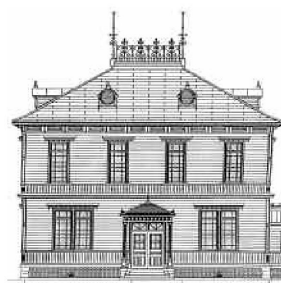


図3：清力酒造「営業所」



図4：旧日本生命九州支社

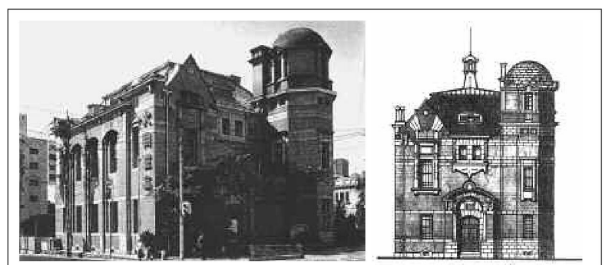


図5：大同生命福岡支社（「大同生命調査報告書」より複写転載）

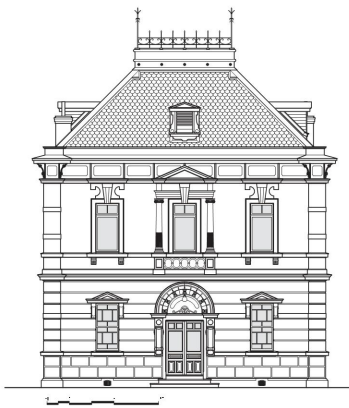


図6-1：南正面図

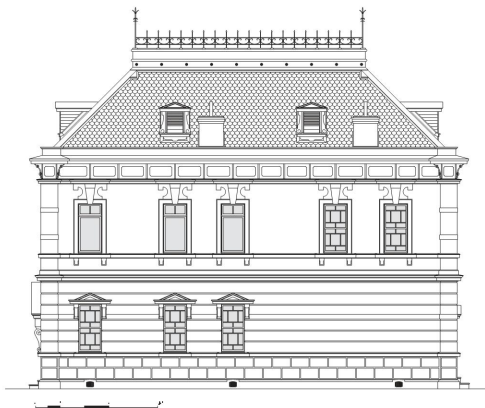


図6-2：東立面図

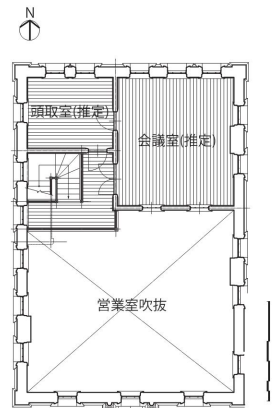


図6-5：2階平面図

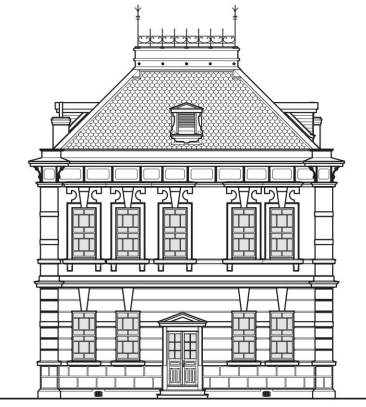


図6-3：北立面図

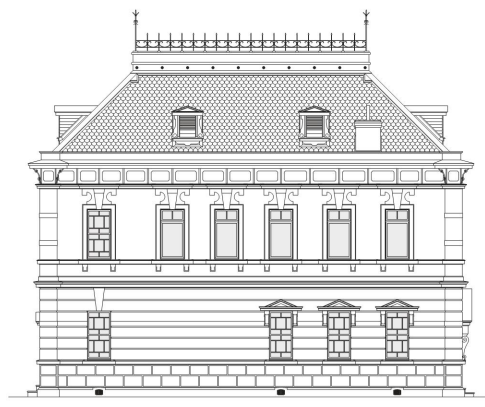


図6-4：西立面図

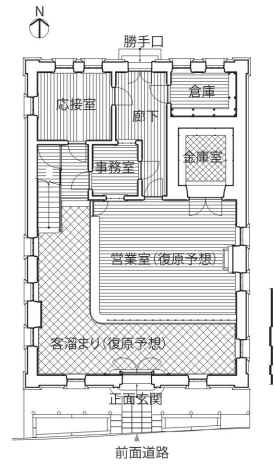


図6-6：1階平面図
(営業室は復原図)

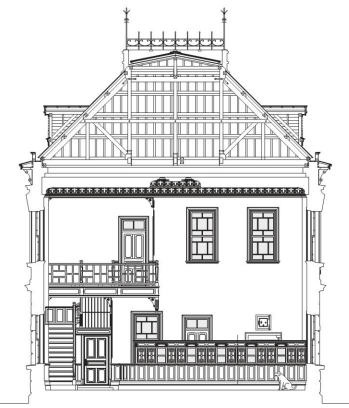


図6-7：東西断面図 (カウンター
および金庫扉は復原図)

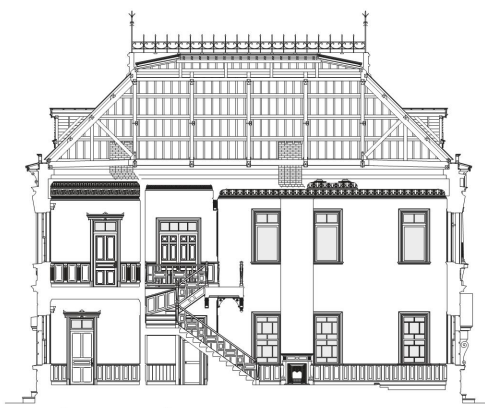


図6-8：南北断面図

図6：旧三瀧銀行建築図面



図7-1 : 正面の古典系意匠



図7-2 : 筑後川からの眺望

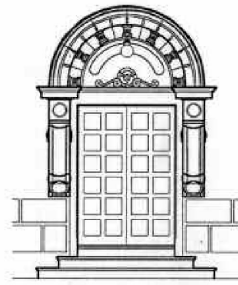


図7-3 : 正面玄関意匠図



図7-4 : 正面玄関辰野式アーチ庇



図7-5 : 営業室から階段を見る



図7-6 : 営業室暖炉



図7-7 : 営業室風景 (カウンターは推定復原)



図7-8 : 廊下から事務室方向を見る



図7-9 : 金庫室天井



図7-10 : 軒天井持ち送り



図7-11 : 照明ブラケット



図7-12 : 金属製打出天井板 (頭取室)

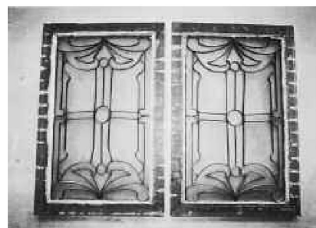


図7-13 : カウンタースクリーン



図7-14 : 暖炉

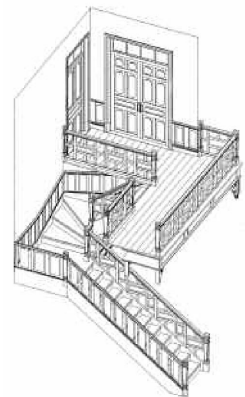


図7-15 : 階段室アイソメ図

図7 : 旧三満銀行の建築的特性要素

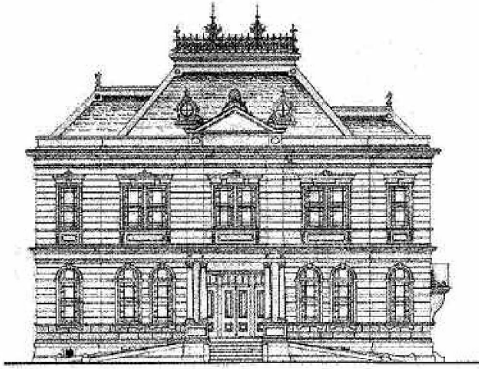


図8-1：正面図

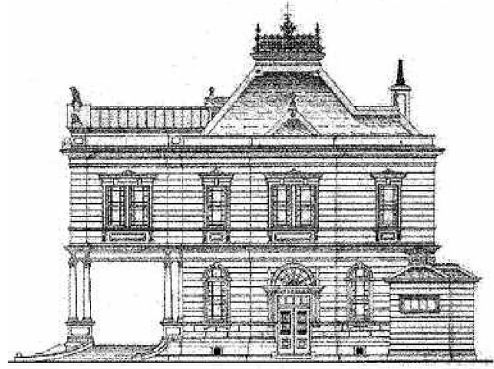


図8-2：西立面図



図8-3：辰野式一子庇

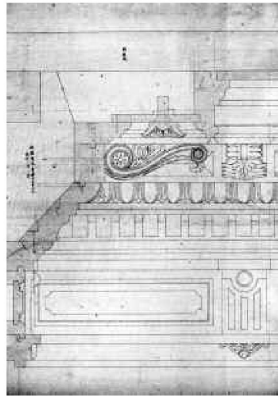


図8-4：内装詳細図



図8-5：正面外観



図8-6：竣工記念写真（明治42年）

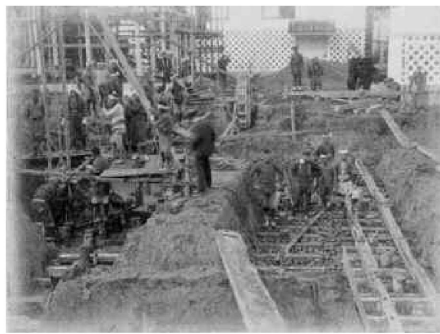


図8-7：地業風景（明治40年）



図8-8：暖炉

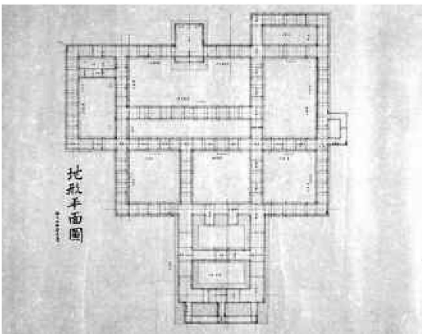


図8-9：杭位置図

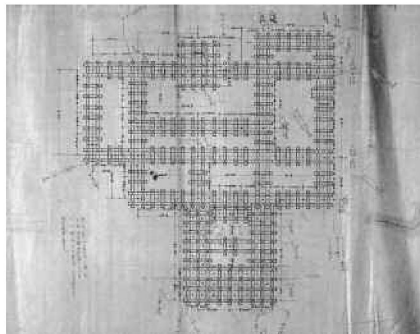


図8-10：地形計画図（地形は当時の呼称）



図8-11：煙突

図8：旧立花寛治邸西洋館の建築的特性要素（8-1、2、4、6、7、9、10は「名勝松濤園内御居間他修理工事報告書第2編」より複写転載）

一(大蔵省臨時建築部)設計の化粧積み煉瓦造2階建「旧門司税関庁舎」(北九州市)がある。他に福岡県技師三條栄三郎が大蔵省の妻木頼黄らの指導によって設計にあたった煉瓦造地下1階地上2階建「福岡県旧県庁舎本館」の起工は明治44年、竣工は大正4年であった。

これらによっても、「旧三瀨銀行」は、日露戦争(明治37~38年)の終わった後の福岡県の民間工事では最初期の煉瓦造2階建洋館建築であったと評することができる。

2-3. 大工棟梁箴島傳太郎

「大川市誌」に紹介された旧三瀨銀行についての記述に、「棟梁は中古賀の名工箴島傳太郎であり」とある。箴島傳太郎が清力酒造の「営業所」を建てた同一棟梁であることは、この営業所棟木に墨書された「監督箴島善助、大工棟梁箴島傳太郎、左官富田七藏、石工箴島龜太郎」などの工事関係者の氏名から想定できる⁸⁾。箴島傳太郎が旧三瀨銀行工事に関わるのは、「営業所」の棟梁請負と同様に、地業や煉瓦積み工事を除く、木造部と仕上げの施工を地元棟梁として請負い工事を行ったのではないかと推察される。即ち、旧三瀨銀行の木製の扉や窓の枠飾り、ガラス窓の棧割などの木工ディティール、さらに左官工事などでも、「営業所」の職人仕事に共通する伝統的な手堅い技術が見られる(図9)。

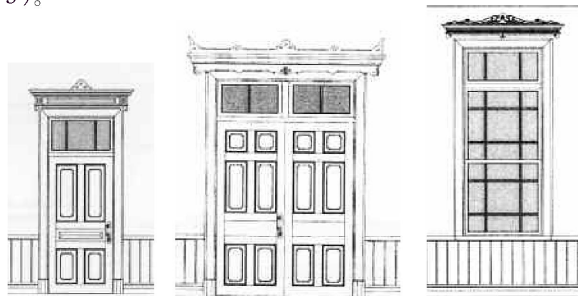


図9：旧清力酒造「営業所」(現大川市立清力美術館) 建具

換言すれば、大工棟梁が全ての工事職人を統括して請負っていた伝統的な建築方式から、西欧の建築技術を学んだ技術者が作成する設計図面に基に工事を請負する建築方式に転換したことを表している。箴島傳太郎が共に工事に関わった「営業所」と「旧三瀨銀行」は、ちょうどこの建築工事請負のあり方が変化していく分岐点になっているようである。

このような地業・基礎工事は、煉瓦造の標準仕様による近代的な建築請負や施工の一端を示すことにもなっている。後述する「旧立花寛治邸西洋館」(柳川市)でも、地業と基礎工事が出来上がった後に、博多大工棟梁讃井傳吉が請け負っている⁹⁾。つまり、地方の洋館建築の建設でも、地業・基礎工事と上部工事の分離発注が行われ、棟梁職がすべて

の発注を行う元請体制から請負業に変化しはじめていたといえる¹⁰⁾。

2-4. 松杭を打つ地業と煉瓦積職人

大川市誌に記述された「石工は上方から呼んだ」という内容からは、煉瓦は地元職人によって積まれたのではなく、上方から呼ばれた煉瓦積職の「渡り職人」¹¹⁾の手によるものであったことを示唆している。また、「松杭を打ち、基礎工事に1年かかった」と旧三瀨銀行の元所有者であった真崎悟氏から教示いただいている。すなわち旧三瀨銀行の基礎工事は、松杭を打ち、木製筏を組んで割栗石を並べてコンクリートを打つという地業が行われ、続いて上方の煉瓦積職人によって基礎工事と一体に構造体が造られたと推定される。筑後川河畔の軟弱な地耐力であれば、当然の地業であり、また煉瓦積工法であった。

旧三瀨銀行が堅固に現在まで活用され続けているのは、こうした高い技術水準の地業や、専門職による煉瓦積みの成果であることは容易に推察できる。実際、これまでに不同沈下が見られないこうした工法の確かさもまた、一つの歴史的価値として記録できる。

同様の地業が、旧三瀨銀行と同時期に、柳川城堀割に囲まれた軟弱地盤で基礎工事を行った木造2階建「旧立花寛治邸西洋館」でも見られる。設計は福岡県技師西原吉治郎が行い、工事監督は佐賀県技師であった亀田友次郎が担当している¹²⁾。この西洋館の明治40年撮影の地業風景写真(図8-7)には、現場監督者が中央に立ち会い、遣形、根切、掘出、地業用檜組松杭打方、割栗石敷、木造筏組の工事を行っている様子が詳細に写し出されている。この地業は、杭位置に関する図面(図8-9)、地形計画の設計図(図8-10)を用いたものであり、明治41年発行の「家屋建築実例壹巻」¹³⁾の実例仕様でも示されている煉瓦造の標準工法と同等である。

また、同様の地業・基礎工事は、明治34年12月に竣工した官営工事「日本赤十字社福岡支部」(福岡市)でも行われていた。1階が煉瓦造で2階が木造の洋館建築である¹⁴⁾。明治35年の「建築雑誌」には、「構造概要建坪八十四坪軒高土臺下端より三十尺基礎は砂層なるを以て巾二尺厚一尺五寸コンクリート地形(当時の地業の呼称)とし(中略)本建築の設計及工事監督は準員西原吉次(治)郎君なり」と紹介されている¹⁵⁾。これは福岡市須崎の那珂川河口の軟弱な地盤における煉瓦造基礎工事を、福岡県土木部に所属する学会準員の技師西原が担当して行ったことを表している。西原は工手学校在学中に、設立されたばかりの造家学会(現建築学会)に準会員として入会している¹⁶⁾。つまり工手学校の教授陣から学会入会の推薦を受けるほどの建築技術者がこの工法を指導したことに他ならない。



図10:「旧三瀧銀行」正面外観(昭和23年頃撮影 個人蔵より複写転載)

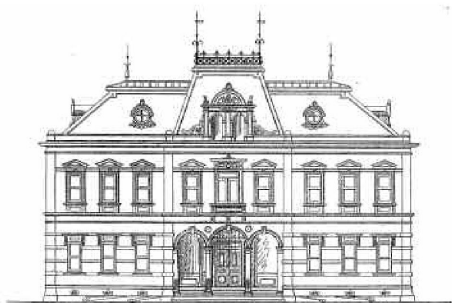


図11:「旧日本赤十字社福岡支部」正面図(「建築雑誌」第184号より複写転載)

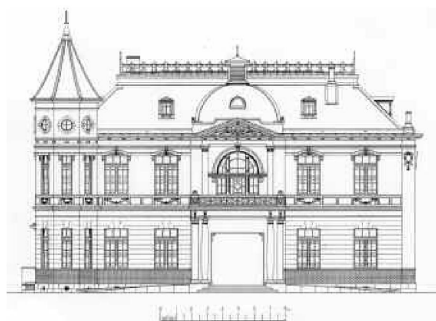


図12:「旧福岡県公会堂貴賓館」正面図(重要文化財 旧福岡県公会堂貴賓館保存修理工事報告書より複写転載)

これら「旧三瀧銀行」「旧立花寛治邸西洋館」「日本赤十字社福岡支部」の地業・基礎工事に共通することは、いづれも、敷地が水分を多く含んだ軟弱な地質であり、杭を打っても杭の耐重が不足する場合に用いられる地盤改良型工法が実施されて煉瓦基礎が積まれていることである。

2-5. 煉瓦造石造風セメント漆喰壁

旧三瀧銀行の建築意匠の特性のひとつに、辰野式フリー・クラシックのように赤煉瓦の壁に石の装飾帯を挟み

込んで廻したそれとは意匠の表現法が異なっていることを指摘したい。つまり赤い化粧煉瓦と御影石の装飾で構成される辰野式煉瓦造建築の意匠とは対照的に、旧三瀧銀行は、煉瓦はあくまでも隠れた構造体だけに用いて、壁面は牡蠣殻灰入りのセメント漆喰を塗って石造風の白い建築に表現されていることである。隅石風の柱型に囲まれて、1階壁面は横目地を切り、2階壁面は眠り目地に塗られた左官仕上げである(図10)。

この肌理が細かく灰白色に見える左官仕上げは、「石粉とセメントを調合した石色漆喰塗」と呼ばれるもので、辰野・葛西事務所設計の明治38年7月竣工の「東京火災保険株式会社」の仕様書¹⁷⁾に見られる仕上げと同種のもので推定される。地元大川ではこの塗壁仕上げを、微塵粉(みじんこ)と呼び、強固な漆喰壁の代名詞となっていた。

洋館の外観をセメント漆喰を用いて石造風に見せる意匠は、前述の「日本赤十字社福岡支部」にも見られる(図11)。正面の基壇部を「側腰石車寄及玄関共徳山産花崗石を用い」¹⁸⁾て、1階、2階とも建物の角柱型は漆喰を盛り上げて隅石風に表現され、壁面もまたセメント漆喰に古典系の特徴である線形石と胴蛇腹石を帯状に廻している。窓枠や三角破風も石彫りを想定している。つまりこの建築の外装は、旧三瀧銀行のセメント漆喰仕上げに石の装飾帯を廻す意匠と同種のものである。

このようなセメント漆喰に石を挟み込んだ石造風の意匠は、旧三瀧銀行の竣工からわずか5ヶ月後の明治43年3月に竣工した「旧福岡県公会堂貴賓館」(設計:福岡県技師三條栄三郎)にも展開されている(図12)。しかしこの建築は木造建築であり、腰壁は御影石に代わって白いタイル貼りとなっている。

したがって、「日本赤十字社福岡支店」と「旧三瀧銀行」に見られる煉瓦造セメント漆喰仕上げによる白い石造風洋館意匠は、「旧日本生命九州支社」の辰野式の赤煉瓦造意匠と対比される貴重な歴史的建造物となっている。

2-6. 石彫の装飾

旧三瀧銀行の建築様式は古典系ルネサンス式を基調とするが、壁面を飾る装飾意匠からはアール・ヌーヴォーの影響を受けた個性的な表現も見られる(図6)。

台形のマンサード屋根は、頂部を鉄柵で飾り、軒天井に鉄製の渦巻き型の持ち送りを配し(図7-10)、4方に屋根窓(ドーマーウインドウ)を付けてスレートで葺かれていた。正面壁の中心軸には、熊本産三角石に刻まれた古典系モチーフの三角破風(ペディメント)とイオニア式列柱を配し(図7-1)、正面玄関は、徳山産御影石の持ち送りとアーチを組み合わせた庇を飾って、銀行らしい風格を表している。

さらに、その中心軸を対称にした両脇1階の窓上部には、持ち送りの付いた小さな三角破風を飾り、同じ形式の窓が営業室の東面と西面まで回り込んでいる。つまり、これら窓の装飾は、営業室1階の外部意匠を特徴づける飾りとなっている。この窓に対して2階部の窓は、円形と要石形を一つに組み合わせて抽象化した装飾図形で飾られ、同じ装飾が2階四周のすべての窓を飾っている。このような装飾手法は、古典系装飾を凡例としたものではなく、当時の西欧の世紀末芸術運動として展開されていたアール・ヌーヴォーの特徴の一つである平面的幾何図形を連続配置する意匠構成と共通している(図7-2)。習熟された装飾美術ではないものの、アール・ヌーヴォーと古典系モチーフの装飾を共存させる明治末期の意欲的な建築表現と評される。

2-7. 迫り出しアーチ型玄関庇

正面中央の持ち送りと迫り出しアーチを組み合わせた玄関庇の意匠は、明らかに辰野式フリー・クラシックを模範とした意匠である(図7-3、7-4)。「旧日本銀行京都支店」(明治39年)(図13)、「帝国海上運送火災保険株式会社」(明治41年)(図14)など辰野式煉瓦造の正面玄関口は、古典系モチーフの徳山産御影石持ち送りに支えられた迫り出しアーチの庇で飾られている。旧三瀧銀行では、この辰野式庇を正面中央に飾ることで、建て主らが構想する都市基盤整備の象徴となる銀行建築にふさわしい姿を示している。



図13：旧日本銀行京都支店

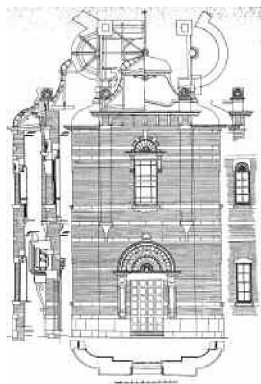


図14：帝国海上火災保険株式会社(日本の建築[明治大正昭和]3より複写転載)

この持ち送り付きアーチ庇と同じ雛形が、木製ではあるが前述の「旧立花寛治邸西洋館」の西側玄関を飾っている(図8-2、8-3)。おそらく、煉瓦造銀行の正面玄関意匠と、木造迎賓館の勝手口意匠の調和の違いを意識した素材の使い分けと見られる。

2-8. ガラス窓の種別

旧三瀧銀行のガラス窓の意匠は2種類に区別されている。

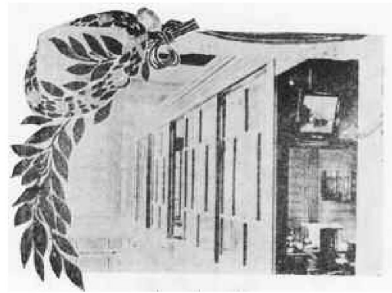


図15：旧清力酒造「営業所」(現大川市清力美術館)(SEIRIKIより複写転載)

一つは、営業ホール上部に取り付けられた南、東、西を飾る欄間付きの一枚ガラス回転窓である。他のすべては、室内の仕切り窓を含めて同じ意匠の上げ下げ窓に統一している。この上げ下げ窓の棧制意匠が、同時期の洋館で見かけるガラス窓の縦繁棧割と異なり、和風の引違ガラス戸に類似した棧割を用いている。この棧割は、前出の棟梁箴島傳太郎が既に建てた清力酒造「営業室」の事務所仕切り窓にも見ることができる(図15)。さらにこの形状は、吹き抜けに向けて開放された階段の手すり形状に影響を与えている。こうした一つの形状を他の装飾部位にも応用展開する手法もまた装飾意識の表れと見ることができる。

2-9. 金庫室アーチ天井

金庫扉やマンホール扉は戦中の鉄材供出によって撤去されているが、遺された煉瓦天井は65×65×7.5mmのH鋼を2本渡した3連アーチが架けられている(図7-9)。これは、煉瓦造建築の耐震耐火の性能を高めるために、明治24年(1891)の濃尾地震後にいち早く建築学会によって普及した工法のひとつである¹⁹⁾。このように旧三瀧銀行の金庫室とそのアーチ天井は、明治後期の煉瓦造構造の先端工法を用いた遺構として保存されなければならない。

2-10. 空間計画と意匠

間口6間、奥行き9間の単純矩形平面の1階正面側半分を金庫室が付随する吹抜営業室に、その後ろ半分を事務と応接関係と倉庫に、2階を頭取室と会議室の連続室に構成している。部屋名については資料がなく類似した銀行の室名から想定しているが、高い天井と装飾の密度、空間のボリュームから判断して、頭取室は2階通路の正面室を、会議室はその右室を当てるのが妥当であろう。

頭取室と会議室に向かう道行き空間となる2階階段バルコニーは、吹抜に張り出して営業室を一望する視点場になっている(図7-15)。また、会議室に削りぬかれた2つの室内窓も営業室を眺める空間装置となっている(図7-6)。つまり設計者は、頭取らの動きを想定した上で、バルコニーと室内窓を、銀行の機能と威厳を示す装置として計画して

いることが明らかである。

営業ホールの吹抜空間は、明治期の銀行吹抜で見られる回廊バルコニーを取り払っているため、東面の暖炉煙突と西面の柱型の垂直性が強調されている。壁は白い漆喰で、天井は白いペンキで仕上げ、床をリノリウムで敷き詰めた空間に、3方高窓からの光がこの白い空間に降り注ぐ構図である（図7-7）。

一方、2階室からは筑後川海運と町並み景観が手に取るように眺められる。このように1階営業室の吹抜空間は若津の街路に向かって開き、2階室では筑後川の景観を取り込む建築計画は、当時の欧州で動き始めていたセセッション建築などの近代的な建築計画にみられる「地形と背後の風景を十分に利用する」²⁰などと共通した設計手法であることを指摘できる。

空間意匠のもう一つの特徴は、倉庫と金庫室を除いた通路を含む全ての空間において、床に灰白色のリノリウムを敷き、壁を白漆喰で仕上げ、天井一面を白く塗られた金属製打出天井板で飾る室内意匠の統一性が見られることである。この意匠の感性は、これまでの古典系をモチーフとした洋風装飾から分離してより新しい装飾を求める兆しと見て取れる。（図7-5、7-6、7-8）。

また、金属製打出天井板（図7-12）や唐草文様のカウンター仕切り（図7-13）、照明ブラケット（図7-11）、暖炉のタイル（図7-14）などからは、アール・ヌーヴォーの装飾的な工業製品を積極的に導入する姿勢が読み取れる。

「大川市誌」の記述でもこれら工業製品に注目して、「天井はドイツ製の厚い鋳型打ちブリッキを使ったり、ペチカは大理石やイタリア製のタイルをつかうというようなハイカラな建物」²¹と紹介している。天井板は実際には装飾文様を亜鉛鉄板を成形したものであるが、当時において舶来品を使った注目すべき新しい建築として認めている。

こうしたなかでも2階頭取室の金属製打出天井板は、この建築の最新性を印象づける要素となっている。カーブして迫り上がる古典装飾文様が打ち出された蛇腹と一体に張られた天井意匠からは、新しい建築に新しい素材の導入を図る意志が伝わってくる。この工業製品の特性については次稿で明らかにする。

3. 福岡県土木課技手西原吉治郎

旧三瀨銀行の建築的特性を探るなかで明らかになった銀行設立の背景、地域の都市景観を考えた建築計画、煉瓦造の先進建築技術、旧来の古典系意匠に加えた新しい装飾意匠などから推察すると、この建築の設計者像として、「旧日本赤十字社福岡支店」と「旧立花寛治邸西洋館」で設計実績のある福岡県土木課の技手西原吉治郎がまず浮かび上がってくる。そこで、西原の設計を考察するために、西原

が受けた教育環境と、福岡県土木課での実務環境を見ることにする。

西原吉治郎は、明治元年に山口県において生まれ、明治22年(1889)2月開校の工手学校（現工学院大学）造家科に入学して同23年6月に第3期生として卒業している²²。

「近代日本建築学発達史」によると、工手学校は、帝国大学や東京職工学校など大学出身の技師を補助すべき工手の養成を目的として、工科大学の教授らによって設立された学校であった。建築分野の発起人には辰野金吾と藤本壽吉が参加している。当初の授業内容は製図（中村達太郎）に重点がおかれ、地形および瓦職大意（片山東熊）、屋根職大意（河合浩蔵）、仕様書（藤本壽吉）、測量など、実地向きの教育が行われていた。教員はほかにも、妻木頼黄、渡邊譲、葛西萬司らがいた²³。一方、同時期の卒業生には、辰野片岡事務所によるアール・ヌーヴォーの館として知られる「旧松本家住宅」（北九州市）の工事監督を務めた久保田小三郎がいる²⁴。

明治中期は、西欧からアーツ・アンド・クラフツ運動に続くアール・ヌーヴォーなどの装飾美術の情報が伝えられた時期である。つまり、西原は、この世紀末芸術が喧伝された時代の教育環境の中で、実際に役立つ建築技術を厳しく学んでいたのである。また西原は辰野や片山らの教育によって育成された建築工手の最初期の世代であり、全国に派遣されて、創設されたばかりの工業高校や官公庁の建築中堅技術者としての活躍が期待されていた。

西原は、明治30年（1897）4月に福岡県の土木技手として採用され、同31年には通常県会の参与員となっている。当時、土木課の建築を担当する技手はわずか数名に過ぎず、西原はその内の一人であった。同33年9月には、技手白岩正雄が文部省に出向したため、「旧日本赤十字社福岡支部」設計の再委託を引き受けている²⁵。続く明治40年7月には、第13回九州沖縄八県連合共進会準備委員を命じられるものの、同11月には愛知県に出向する。この間の土木課職務として担当した官庁工事名は記録されているが、民間工事の指導協力については記録が残されていない²⁶。

旧三瀨銀行の起工は、明治40年夏頃と思われる。明治後期の煉瓦造建築は、構造的技術導入を図るため、建築教育を受けた技術者によって作成された設計図および仕様書によって工事が進められることが一般的であった。つまり、西原が旧三瀨銀行の設計に関わっていたとすれば、このような設計図と仕様書を作成したはずだが残されていない。しかも基礎工事の初期の段階で交代を余儀なくされていた。

西原が出向した後の明治41年4月に福岡県土木課に着任したのは技師三條栄三郎であった。三條は、前述の「旧立花寛治邸西洋館」の工事監督を務めた亀田友次郎と佐賀県宮崎の同僚でもあった。この西洋館とほぼ同じ地域に在っ

表1: 明治末期の福岡県洋館建築

建築名	竣工年	設計	工事監督	施工	構造	基礎建築様式
日本赤十字社福岡支部	明治34年12月	西原吉治郎	白石勝太郎	岩崎組(岩崎三郎)	1階煉瓦造・2階木造	古典系ルネサンス
福岡県庁事務所	明治39年11月	中村綱次	磯崎善助	榎野高徳太郎	木造2階建	作風
旧日本生命九州支社	明治42年2月	辰野訥事務所	辰野訥事務所	清水組	煉瓦造2階建(1部3階)	辰野式ブリー・クラシック
旧三瀧銀行	明治42年10月	西原吉治郎(推定)	三條宗三郎(推定)	榎野高徳太郎	煉瓦造2階建	古典系ルネサンス
旧立花寛治郎西洋館	明治42年末月	西原吉治郎	亀田友次郎	榎野高徳太郎	木造2階建	フランス・ルネサンス
旧福岡県公会堂貴賓館	明治43年3月	三條宗三郎	三條宗三郎	岩崎組	木造2階建	フランス・ルネサンス
旧松本進水邸洋館	明治43年4月	辰野訥事務所	久保田小三郎	安田松本商店臨時建築部	木造2階建	ハーフ・ティンバー
旧門司税関洋館	明治43年3月	森安宗一	筑橋賢吉	清水組	煉瓦造2階建	ルネサンス
旧大日本生命福岡支店	明治45年2月	田中実	田中実	清水組	煉瓦造2階建	ルネサンス

て工事時期もまったく重なることから、三條は「旧立花寛治郎西洋館」と「旧三瀧銀行」の西原の残務に関わりをもったことが推測される。実際、三瀧銀行頭取中村綱次が取締役を務める「九州セメント」(後の「日本セメント」)のセメント試験表を「旧立花寛治郎西洋館」の現場に送付していた記録がある²⁷⁾。

三條に関する詳論は次稿に譲るが、三條は着任早々に「旧福岡県公会堂貴賓館」を設計することになる。このプロジェクトもまた第13回九州沖縄八県連合共進会の準備に入っていた西原から三條へ引き継がれた格好になる。

愛知県に提出した西原の履歴書に、「旧立花寛治郎西洋館」が民間工事であることを理由に記載されてないのと同様に、旧三瀧銀行の設計者像がこれまで明らかにされていないことは、この旧三瀧銀行もまた民間工事であったからと考えられる。事実、当時福岡県が発注する多くの煉瓦造建築工事を請け負っていた岩崎組の「岩崎建設百拾年史」には、「官庁工事は民間工事で異なり、誰々設計といった形ではなく、土木課とか建築課とかの職能団体で示されることが多い」との記述がある²⁹⁾。このことから見ても、官庁に在籍する建築技術者が、民間工事に技術提供したとしても、その個別業績が後世に記録されることが少ないのは、このような旧慣があったことによる。

4. まとめ

建築的特性と設計者像は以下の通りである。

- ①旧三瀧銀行は、中村綱次など地域振興を計る地元産業人の発意で、都市基盤開発となる鉄道施設と相俟って建設され、地域の歴史的文化的景観を形成している。
- ②建築の構想と装飾的意匠には、中村綱次が施主の立場で関与して、地元大工棟梁篠島傳太郎が伝統的な棟梁請負方式から近代的請負方式に転じた施工を行った。
- ③日露戦争の終わった後の福岡県の民間工事では最初期の煉瓦造2階建洋館建築で、地業は軟弱地盤を考慮した地業

が行われ、煉瓦は露出せず構造体に使用され上方の石工が積んだ。

- ④正面意匠は、左右対称に均整をとった古典系ルネサンス式の石彫り装飾に加えて、上層部窓をアール・ヌーヴォーの平板石ペディメントと軒蛇腹持送金物で装飾した獨創性がある。
- ⑤正面玄関を飾る意匠として、辰野式銀行建築の玄関を象徴する徳山産御影石持ち送り付きアーチ庇を「写し」ている。
- ⑥白い石造風セメント漆喰壁に古典系の石材装飾を挟み込む建築意匠は、同じ明治42年に福岡市に建築された「旧日本生命九州支社」の辰野式赤煉瓦造の意匠と対照的である。
- ⑦室内意匠には、アール・ヌーヴォーの装飾的な金属製打出天井板、カウンタースクリーン、照明ブラケット、暖炉用絵付タイルなどの内装部品を使用している。
- ⑧ガラス窓の意匠は、室内機能に対応して2種類に区別される。
- ⑨金庫室の天井ヴォールトは、濃尾地震後の煉瓦造の先端工法を用いた遺構である。
- ⑩階段バルコニーは、吹抜営業室を一望する視点場として意匠され、その手摺は獨創性がある。
- ⑪吹抜営業室は回廊を付けず垂直の漆喰壁面が強調され、上部窓は回転窓にしている。
- ⑫室内意匠は、白い床、壁、天井に統一されセッション式である。
- ⑬建築意匠の設計者像として、「旧日本赤十字社福岡支部」や「旧立花寛治郎西洋館」を設計した福岡県技手西原吉治郎が推察される。

注および参考文献

- 1) 鈴木博之、現代の建築保存論、王国社、pp.9-10、2001
『1994年11月に奈良で開かれた文化遺産に関する国際会議でのオーセンティシティは、形態と意匠、材料と材質、用途と機能、伝統と技術、立地と環境、精

- 神と感性、その他内的外的要因を含むものだと紹介して、このオーセンティシティを「由緒正しさ」と解釈することを提案している』
- 2) 大川市誌、福岡県大川市役所、pp.628-636、昭和52年12月
 - 3) 大川市指定文化財調査報告書 旧株式会社三瀧銀行、大川市教育委員会、平成9年3月
 - 4) SEIRIKI、清力酒造株式会社、大正8年3月
 - 5) 前掲2)、p.493
 - 6) 前掲2)、pp.628-637
 - 7) 石井邦信、明治洋風建築の地方への普及について 福岡市を一例として、日本建築学会論文報告集、第66号、pp.637-638、昭和35年10月
 - 8) 大川市指定文化財 清力酒造株式会社事務所 調査報告書、大川市教育委員会、p.25、平成8年3月
 - 9) 名勝松濤園内御居間他修理工事報告書、第1編修理工事、第2編資料、名勝松濤園修理事業委員会、御花、p.24、2007（平成19）
 - 10) 初田亨、職人たちの西洋建築、講談社選書メチエ95、pp.176-178、1997年1月
 - 11) 前掲10)、pp.118-120
 - 12) 前掲9)、p.18
 - 12) 前掲9)、p.16
 - 13) 辰野金吾、葛西萬司、家屋建築實例壹巻、須原屋書店、p.184、明治41年9月
 - 14) 村松貞次郎、大同生命福岡支社旧社屋移築保存調査報告書、大同生命保険相互会社、p.22、1983年12月
 - 15) 建築雑誌、第16輯第184号、pp.126-127、明治35年
 - 16) 瀬口哲夫、建築家・西原吉治郎の経歴と建築活動、日本建築学会計画系論文集、第75巻第651号、p.1264、2010年5月
 - 17) 前掲13)、pp.199-200
「實例帝國海上運送火災保険株式会社建築工事 第一條 漆喰塗材料中石灰及蟻灰ハ白色細末ニシテ濕氣ヲ帯ヒタルコトナキモノ、角又海苔ハ不溶解性ノ雜物混入セラレルモノ、濱苧ハ麻ノ纖維ノ強靱ナルモノニシテ上塗ニ使用スル分ハ白ミ勝チノモノタルヘシ」
 - 18) 前掲15)、pp.126
 - 19) 日本建築学会編、近代日本建築学發達史 復刻版上、文生書院、p.120、平成13年12月
 - 20) オットー・ヴァーグナー、近代建築、訳：樋口清、佐久間博、中央公論美術出版、p.51、1985年10月
 - 21) 前掲2)、p.493
 - 22) 前掲16)、p.1264
 - 23) 日本建築学会編、近代日本建築学發達史 復刻版下、文生書院、p.1828、平成13年12月
 - 24) 小泉和子、明治の洋館松本家住宅の家具、西日本工業倶楽部、p.98、昭和60年9月
 - 25) 前掲16)
 - 26) 河上信行、松岡高弘、福岡県技手西原吉治郎と雇亀田丈平、日本建築学会九州支部研究報告、第49号、p.502、2010年3月
 - 27) 前掲9)、p.16
 - 28) 母里喜久、三條栄三郎その足跡、西日本文化、通巻149号、財団法人西日本文化協会、p.19、昭和54年3月
 - 29) 岩崎建設百拾年史、岩崎建設株式会社、p.69、昭和52年10月